

.NETのトップシェフになるための心構え

レトルト食品と.NETプログラミングの素敵な関係

初音 玲
HATSUNE, Akira

Technology Tools

- Visual Basic .NET
- Visual C# .NET
- SQL Server 2000
- Oracle 9i
- Access 2002
- ASP.NET
- Internet Information Services
- Other:
 - .NET Framework

Level



Samples

デキル開発者を目指せ

「.NET Frameworkってなんだろう?」。

そんなこと気にしなくてもVS.NETでプログラムは作れるから、会社に入ってすぐにプロジェクトに配属されても何も困らない。けれども、もし「できる新人」を目指しているのなら、.NET Frameworkが何なのか、どんな役割を担っているかを知っておくほうが、断然良い。

一方、新入社員ではないけれどVS.NETの世界に来て間もない新人さんは、新入社員とは比べ物にならないくらい重要な役割を担うことになる。.NET Frameworkを知らずにVS.NETで開発を始めるとハマリ道を邁進する危険性があるので、これから説明することをしっかり頭に叩き込んで「できる先輩」「できる上司」となり、給湯室で新入社員に「あの人はさあ……」と言われないように心がけよう。

と言っても、身構えることなどない。これから説明することは、

.NET Frameworkの技術的な詳細でも、オブジェクト指向でも、クラスライブラリの使い方でもなく、「.NET Frameworkってなんだろう?」という根本的な説明だから。

目指せ“誰にでもわかる.NET Framework”なのだ。

もっとも、知識量も理解の仕方も人それぞれ。そのうえ.NET Frameworkの世界は広大だ。詳細に説明しては本誌を全部使ったところで1年経っても終わらない。そこで、これまでのシステム開発の歴史を振り返りつつ、それとどう違うのかを「誰にでもわかる」ように、ごく身近な例をあげて解説してゆこう^[注1]。

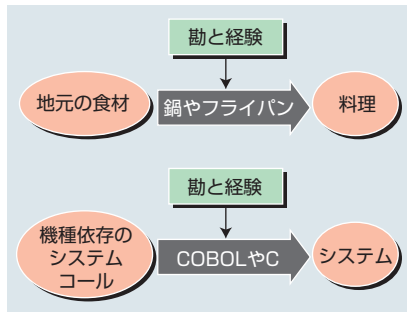
昔むかしのシステム開発

VBが登場する前のシステム開発の状況はどのようなものだっただろう。

システム開発が料理なら、ひと昔前

注1) たとえ話には、たとえ話自体に注目がいって本質を見失うという危険性が付きまとうが、そこは十分注意するつもりだ。

図1：DOS/汎用機時代の調理



は食材の調達に現地へ赴くところから始まっていた（図1）。

Windows前の汎用機時代は、食材の調達範囲は地元だった。そのため、同じような料理でも、その土地土地によって異なる食材が使われていたし、調理法も違っていた。“お雑煮”を思い出してほしいのだが、ミソ味にするかショウユ味にするか、ダシはトリかコンブか、みたいなものだ。この状況は家庭料理^[注2]でも地元のレストラン^[注3]でも同じだった。

でも、違う土地の料理を食べたことがなかったので、別段気にも止めていなかったし、これはこれで、同じ地元の人間にとっては食材はもちろん誰が作ったのかもハッキリわかる、慣れ親しんだ味だったので、幸せな食生活を営むことができたわけだ。

そんな穏やかな暮らしも、ある日を境に激変する。知り合った隣の彼女（あるいは彼）から手料理をご馳走になったり、彼女（あるいは彼）の地元のレストランでデートをするようになったためだ。そこで供された料理は、同じ料理であるにもかかわらず食材が異なっていたり、食材は同じなのに自分が慣れ親しんだ味とは違う美味だったのだ。

こうなるとなんとかして新しい食材を手に入れたいし、新しい調理法やレシピだって試してみたい。でも、自分の地元では、食材は手に入らないし調理方法もわからない。レストランのシェフを呼んで調理してもらおうなどという贅沢は論外。手っ取り早く、引っ越ししてしまえば^[注4]問題は解決するが、そう簡単に引っ越しもできないし、引っ越ししてみたら、やはり地元のほうがよかったなんてこともあるだろう。

そんなときに登場したのが“Windows”というフランチャイズのスーパーマーケットだ。他にもUNIXやMacintoshといったチェーンストアもできて、地元にいってもいろいろな食材が入手できるし、店に行けば「今夜のオススメ一品」などというレシピまで用意されている。

こうなれば、引っ越しをしなくても、他の地方のさまざまな食材も買えるし、自分の知らなかった調理方法もわかるという寸法だ。地元のレストランのメニューも格段に品揃えが良くなったはずだ。

ところで。

食材も手に入りレシピもわかった。調理器具もあるという状態で「さあ、料理を作ってください」と言われたでしょう。調理人は、

- ・ 普段、その料理を作ったことのあるシェフ
- ・ その料理を食べたことのあるシェフ
- ・ 似たような料理を作ったことのあるシェフ
- ・ 普段料理をしているシェフ
- ・ まったく料理をしないシェフ（それ

は“シェフ”なのか?)

の4人。この中のどのシェフの作った料理を食べたいだろう。

私だったら、その食材でその料理を作ったことのある経験豊かな料理人が作ったものを食べたいと思う。みなさんはどうだろうか。

要は、食材もレシピも調理器具も手元にあるという状態でも、作り手の技量によって、出来上がってくる料理の質は違うということだ。

美味しい料理を作るには、

- ・ 食材に対する深い理解
- ・ レシピ内容を正しく理解する力
- ・ 調理器具に対する理解

さらに、もてなしたい人が望んでいる料理を推察する力など、さまざまな技量が求められるわけで、真心だけでどうにかなる問題ではないことは、おそらく誰もがわかるだろう。

さて、現実の世界に戻ってみよう。

VBが登場する前のWindowsシステム開発では、Windows API (=食材) に対して、Windows SDKなどのマニュアル (=レシピ) を元に、C言語 (=調理器具) でシステム開発 (=調理) を行ない、システム (=料理) を完成させていた。当然、Windows APIに対する深い知識、SDKなどのマニュアルに書かれている内容を正しく理解する力、C言語に対する理解、お客様が求めて

注2) 内注ソフトや手作りプログラムによるシステム開発

注3) 開発会社に依頼してのシステム開発

注4) マシンのリプレース